

2019年度教育研究活動報告用紙(様式9)

氏名 小田日出子	職名 教授	学位 修士(法律学)(九州国際大学 1998年)
----------	-------	--------------------------

研究分野	研究内容のキーワード
基礎看護学, 基礎看護技術 社会人基礎力の育成・向上	看護技術教育, シミュレーション 社会人基礎力, 主体的学習

研究課題
看護技術教育に関する研究(シミュレーション教育) 大学生の社会人基礎力の向上と主体性の育成に関する研究

担当授業科目
看護技術論(→早期看護実習のみ)(1年前期) 生活援助技術論演習(1年後期) フィジカルアセスメント技術演習(1年後期) 診療関連技術論(→統合技術試験(実技)の試験監督及び評価)(2年前期) 看護過程論(2年前期) 看護キャリア形成論(2年前期) 基礎看護学実習Ⅰ(1年後期), 基礎看護学実習Ⅱ(2年前期) 看護総合演習(4年前期・後期) 看護総合実習(4年前期)

授業を行う上で工夫した事項(※ 助手については、実習・演習等の指導を行う上で工夫した事項)
<p>授業科目名【看護技術論(→主に早期看護実習の企画・実施・振り返りを担当)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年前期「看護技術論」の履修者は、2019年度入学生93名であった。主には実習の企画・運営・振り返りを担当した。 ・新1年生95名を対象に、例年どおり6月第4週の2日間、看護技術論に位置づけた早期看護実習を企画・実施した。今年度は2病院(JCHO九州病院・小倉記念病院)で見学実習を行った。 ・本実習のねらいは看護の“Early exposure”であり、病院で療養生活を送る人々を対象に看護を実践する看護師の“Shadowing”を通して、臨床看護の役割・機能、看護活動の実際を理解すること、加えて看護学生であることへの自覚を高め、今後の学習への意欲向上を図ることであった。 ・学生93名のうち、JCHO九州病院で実習に臨む10グループ53名を担当・引率した。実習前1週間、臨地実習を効果的に進めるためのチーム作りを兼ねて、メンバー間で討議する機会を設けた。実習グループ毎に課題学習に取り組み、学生の学習動機の高揚や主体的学習行動を促した。事後の学習成果発表に向けても、担当した10グループについて、基礎看護学領域の講師1名、助教1名とともに、プレゼンに向けてのきめ細かな助言と指導を行った。 ・実習後の学習成果発表では、実習施設毎に、各グループ3分の持ち時間で、パワーポイントによる発表を行った。事前の課題学習で共有した実習の目的・目標に基づいて、それぞれ各病院や病棟の特性を捉えた内容での発表であった。発表後、各々の気づきや発見を基に意見交換を行ったが、学生間の活発な意見交換や事後に提出されたレポート内容から、全体を通して、当該実習のねらいは達成できたと判断した。 ・次年度も、今年度と同様の形式・内容で「早期看護実習」を企画・実施したいと考えている。

授業科目名【 看護過程論 】

- ・2年次生104名(→途中2名が長期欠席,最終102名)を対象に,講義・グループワークを組み合わせた授業を展開した。
- ・看護学科LMS(kaname.net)を活用し,毎回の学習目標と授業内容及び授業進行を提示,授業のイメージ化を図るとともに,講義とグループ学習活動を効果的に組み合わせながら,学生の主体的学修を支援した。
- ・講義はグループワークの進捗と連動させ,ワークの学習到達目標と照らして,適時に実施した。
- ・講義には視聴覚教材(パワーポイント,VTR等)を活用した。講義資料をはじめ,使用する教材は全て事前にkaname.netにupし,授業中の資料配布は一切行わず,学生個々の責任で授業準備を整えるよう促した。
- ・グループワークへの支援は,基礎看護学分野の教員3名と助教1名の計4名で行った。基本は教員1名,一部教員1+新任助教1の2人体制をとり,学生6~7名のグループを5グループずつ担当し,各担当教員がグループのチューター役割を果たした。
- ・学習支援体制の充実を図るため,随時,教員間の情報交換を行いながら指導の標準化に努めた。
- ・グループワーク時の振り返りには,独自に作成した観点別評価シートを用い,学生自らが所属するグループの学習活動を客観視するとともに,グループとしての目標達成状況を確認できるようにした。振り返りの結果は全体共有し,他との違いを意識させることで,グループとしての学習活動の活性化を図った。
- ・例年同様,グループ間の学習成果の共有を目的として,各グループが導き出した援助技術の実際をロールプレイングとして発表する機会を設けた。何れのグループも原則としての安全・安楽には留意できていた。但し,対象の個別性をふまえた援助技術の実践に至ったグループは少なかった。また,根拠に基づく援助技術の実践という点においても,全体的に,深く「考える」ことはできていなかったように思う。
- ・当該科目の達成度評価は,筆記(50%),個人学習/課題レポート(20%),グループワーク成果(10%),学習貢献度(20%)による総合評価とした。

最終評価としてのクラス平均は66.7点(最高89点,最低41点)で,昨年度72.4点(最高90点,最低51点)より6ポイント近く低かった。再試験該当者も23(4)名と多く,受験失格者も2名いた。23名中22名が再試験を受験したが,20名が合格,2名は不合格であった。最終評価は,秀0(2)名,優(20)14名,良29(51)名,可56(38)名,不可2名,受験失格1名で,102名中99名が当該科目の履修を修了,3名が次年度再履修となった。

※()内は前年度の人数。

授業科目名【 看護キャリア形成論 】

- ・2年次生104名(→途中で2名の学生が受講を放棄,最終102名)を対象に,授業は,毎回の講義とグループワーク,適時,個人ワークを加えながら,参加型学習を軸に進めた。
- ・当該科目は,2019年度看護学科カリキュラム改訂に伴い新設された科目であり,それを新たに担当することとなった。個人的には,当該科目のねらいは,2年次の学生に“キャリア形成”についての知見を付与し,看護職としての自身のこれからを考える機会とする点にあると考えている。そのため,まずは学生の①自己理解を促し,②職業理解を深めさせ,自身の③キャリア選択に係る意思決定を促す,さらに現時点での④看護キャリアプランが描けるように支援できればと考えた。
- ・当該科目の授業の質を担保するために,キャリアコンサルタント国家資格を取得した(登録番号19062372)。
- ・授業では,学生6~7名のグループを15グループ編成し,教員は全体をファシリテートした。
- ・講義には視聴覚教材(パワーポイント等)を使用。グループワークには,その都度,独自に作成したワークシートを配布し,提示した課題に沿ってワークを進めた。授業開始時に,ワークシートは各自の学習ポートフォリオに綴じること,授業終了時に学習ポートフォリオの提出を求め評価の対象とすることを伝達しておいた。
- ・看護のキャリアアップの実例として,授業3回目に本学看護学科OG3名(がん専門看護師,大学教員,海外での看護師育成支援事業)を外務講師として招聘し,パネルディスカッションを企画・実施した。学生達の興味・関心は極めて高く,積極的に質問する学生も多く見られ予想以上に盛会であった。次年度も継続したい。
- ・当該科目の達成度評価は,学習成果としての課題レポート(40%),グループワーク成果及びプレゼンテーションの実際(40%),学習貢献度(20%)による総合評価とした。

最終評価としてのクラス平均は81.0点(最高63点,最低30点),途中リタイアした学生1名を除き,殆どの学生が標準レベル以上,評価の内訳も,秀11名,優50名,良36名,可4名で,103名全員が当該科目の履修を修了した。

授業科目名【 生活援助技術論演習 】

- ・1年次生96名(途中,退学2名,休学1名→最終93名)を対象に,生活援助技術のうちの「清潔」単元を講義・演習合せて10コマ(20時間)担当し,DVDによる看護技術の反転学習,講義,演習,最後に学生によるパフォーマンスの流れで授業を展開した.
- ・看護の基本技術習得のための学生支援策として,自作「看護技術手順書」に基づく看護学科LMS(Kaname.net)への教材(DVD等の提示を継続し,学生にその活用を奨励,技術習得に向けた自主学修の強化を図った.
- ・授業後は,知識の整理と蓄積を目的にポートフォリオの作成を促した.また,一定期間を置いた後の「おさらいテスト」(1)~(5)を準備し,ケア技術のエビデンスとなる知識の定着を図った.
- ・「清潔」ケア技術の演習は,昨年同様の方法で実施した.使用する物品量の多さ,演習の場と時間確保の難しさ,演習前日からの大掛かりな準備,演習後の片付けなど,例年のことながら,準備・実施・後片付けと最も大変な演習である.加えて,1技術項目をクラス全員で演習すること自体が困難なため,今年度も,「清潔」単元で取り上げる4技術項目を,クラス全体での演習が可能な「寝衣交換」「洗髪」と,2クラスに分かれて行わざるを得ない「全身清拭」「足浴」に分けて企画・実施した.2クラスに分かれる技術項目(全身清拭,足浴)については,物品準備等に要する時間と関係者の負担軽減を図り,クラス全体の技術習得度を高めるために,時間をおかず演習できるよう時間割上で工夫し,当該科目と「フィジカルアセスメント技術演習」の授業時間を組み合わせて実施した.
- ・当該科目の実技試験については,今年度より,その内容・方法ともに変更し,学生2人でペアを組み,協同・連携して3項目中2項目の課題に臨むこととした.生活援助技術としての技術習熟度を測る実技試験の課題としては,この数年「導尿」技術を課題としてきたが,それを(1)車椅子の移乗・移送,(2)背部清拭・寝衣交換,(3)陰部洗浄の3つの技術項目に変更した.理由は,これらは,学生が実習中に①日常的に遭遇・実践する機会が多い,②習得した看護技術として実践しやすい,従って,実技試験の課題とするならば,学生が臨床で③実践可能な援助技術の習熟度を上げるのがよいと考え,「活動・運動」「清潔」「排泄」の各単元で学ぶ生活援助技術を採用するのが妥当と判断した.学生には1ヵ月日以上から課題を提示し,看護学実習室での自主練習を促した.自主練習中は助手・助教が中心となって学生への助言・指導を行ったが,学生は毎日のように看護実習室に入り,積極的,主体的に課題とした技術の習得に励んでいた.実技本試験(3コマ,6時間)では,「背部清拭・寝衣交換」を担当,所定の「技術評価表」に則って学生の技術到達度を評価した.反復練習の成果か,何れの学生も技術習熟度は高かった.評価終了後は全体調整会議に加わり,評価の妥当性・公平性を担保した.試験後,それぞれが獲得した評価点を平均し,2人の得点とした.いずれのグループも16/25点(60%)以上を得点しており,実技の再試験対象者はいなかった.
- ・筆記試験については,担当した「清潔」単元の問題(全体の25%)を作成・出題した.
- ・当該科目の達成度評価は,筆記(60%),実技(25%),ポートフォリオ(10%)および学習貢献度(5%)による総合評価とした.

最終評価としてのクラス平均は70.1±9.50点(最高92点,最低49点),追・再試験該当者9名に対しては,筆記による再試験を実施したが,追試験合格1名,再試験合格4名,再試験不合格4名の結果であった.最終評価の内訳は,秀1名,優10名,良41名,可37名,不可4名で,93名中89名が当該科目の履修を修了,4名が次年度再履修となった.

授業科目名【 フィジカルアセスメント技術演習 】

- ・1年次生96名(途中,退学1名,休学1名→最終94名)を対象に,スクリーニング技術としてのバイタルサイン測定技術,呼吸器系・循環器系,消化器系(腹部),感覚器・脳神経系・運動器系のフィジカルアセスメントに必要な身体診査技術の習得を目標に,一連の流れ(講義→デモンストレーション→技術演習)で授業を展開した.
- ・1単位30時間(2コマ8回)に納めるには,かなりボリュームのある内容であり,また,バイタルサイン測定技術は実技試験を行うため,学生にとってはハードな科目と言える.
- ・自作「技術手順書」をもとに,教員によるデモンストレーションの他,看護学科LMS(Kaname.net)を積極的に活用し,技術習得のための学生の自主学習を支援した.

- ・1年次生に看護の基本技術を確実に習得させるのは容易ではないため、実技試験を伴うバイタルサイン測定技術の演習時は、例年同様、4年次「看護総合演習(看護管理)」のゼミ学生にSAを依頼し、支援を得ている。1年生にとっては、日頃関わる機会のない4年生に直接指導を受けることで、技術習得への関心・意欲が高まり、演習への積極的な取り組みにつながった。先輩・後輩としての学生間の関係性の構築およびピア・ラーニングによる学習意欲の向上を期待しての試みだが、毎回、1、4年生双方にプラスの効果をもたらされている。
- ・実技試験によりスクリーニング技術としてのバイタルサイン測定技術の技術習熟度を確認した。科目責任者として、当該実技試験の企画・準備・運営に当たった。実技試験の結果、受験者94(108)名中、本試合格者69(88)名、不合格者25(19)名で、合格者は全体の73.4(81.5)%で昨年度を8.1ポイント下回っており、バイタルサイン測定技術を習得できたのは約7割だった。本試不合格者25(20)名については、後日、同一課題による再試験を実施、受験放棄した1名を除く21(15)名が合格、3(5)名が不合格であった。不合格者3名については、臨地での患者観察に不可欠なバイタルサイン測定技術を確実に習得させるために、再度、科目責任者による講義・デモンストレーションを実施したうえで、助手、助教および科目責任者による段階的な技術指導と技術チェックを行い、2月末の基礎看護学実習Iに備えた。結果として、実習時は、3名とも滞りなく測定を行うことができていた。 ※()内は前年度の人数。
- ・当該科目の達成度評価は、筆記(60%)、実技(25%)、ポートフォリオ(10%)および学習貢献度(5%)による総合評価とした。

最終評価としてのクラス平均は69.7±13.24(70.1±9.50)点(最高95(92)点、最低29(49)点)、追・再試対象者16名については、筆記による再試験を実施、追試合格1名、再試合格13名、再試不合格1名、受験放棄1名の結果であった。最終評価の内訳は、秀3(1)名、優15(10)名、良37(41)名、可37(37)名、不可2名で、94名中92名が当該科目の履修を修了、退学1名を除く1名が次年度再履修となった。 ※()内は前年度の人数。

学 会 に お け る 活 動

所属学会等の名称	役職名等(任期)	加入時期
日本看護学教育学会		1998年7月～現在に至る
日本看護科学学会		1998年12月～現在に至る
九州看護理論研究会		1999年4月～現在に至る
日本看護診断学会		1999年6月～現在に至る
日本看護技術学会		2007年12月～現在に至る
日本看護倫理学会		2009年6月～現在に至る
日本がん看護学会		2009年12月～現在に至る
日本看護管理学会		2012年10月～現在に至る

2016年度 研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) なし				
(学術論文) なし				
(翻訳) なし				
(学会発表) なし				

外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）			
(1) 共同研究			
研究題目	交付団体	研究者 ○代表者（）内は学外者	交付決定額 (単位：円)
・九州地区における学生ネットワークの構築 －学生の主体的学びを促進するために－	西南女学院 (2019年度教育の 質向上支援経費)	○上村 眞生 小田日出子 天本 理恵 塚本 美紀 高橋 幸夫 篠木 賢一 築別昇一郎 藤川 信幸 宮浦 崇	624,000

外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）			
(2) 個人研究			
研究題目	交付団体	交付決定額 (単位：円)	備考
なし			

社会における活動等		
団体・委員会等の名称 (内 容)	役 職 名 等	任 期 期 間 等
・日本看護協会/福岡県看護協会 ・西南女学院大学認定看護師教育課程	会員 認定看護師教育課程検討委員	2005年4月～現在に至る 2016年4月1日～現在に至る
・門司掖済会病院看護部看護研究指導 ① 第1回：研究計画書の作成 ② 第2回：質問紙調査，質問紙の作成 ③ 第3回：データ分析，最終指導 ④ 第4回：院内研究発表	講師	2016年5月11日～現在に至る 2019年5月24日 2019年6月28日
・西南女学院大学認定看護管理者教育 課程ファーストレベル	「討議法」オリエンテーション講師(1時間) 「討議法」講師(3時間) 「資源管理Ⅰ-看護における情報の管理」講師(6時間)	2019年5月31日 2019年7月6日 2019年7月27日，2019年8月3日
・独立行政法人地域医療機能推進機構 九州地区事務所主催：新任副看護師 長研修	「ファシリテーションに関する基礎知識」講師	2019年9月20日
・北九州市国民健康保険窓口業務委託 業者選定委員会（面接）	選考委員	2019年7月31日

・北九州市国民健康保険運営協議会 ① 令和元年度第 1 回北九州市国民健康保険運営協議会 ② 令和元年度第 2 回北九州市国民健康保険運営協議会	副会長	2012 年 2 月～現在に至る 委嘱期間(継続)：2019 年 9 月 1 日～ 2022 年 8 月 31 日まで(3 年間) 2019 年 8 月 21 日 2019 年 2 月 12 日
--	-----	---

学 内 に お け る 活 動 等 (役 職 、 委 員 、 学 生 支 援 な ど)

【大学委員会】

● 2019. 4. 1～2020. 3. 31 看護学科入学試験委員

- ✓ 大学委員会のうち「入学試験会議」に属し、看護学科入試委員として、看護学科長とともに 2020 年度入学試験に関する事項（入学者選抜要項の検討、入学試験実施に関する事項、入学者選抜方法に関する事項、入学者の選抜に関する事項等）の審議に加わり、入学試験の円滑な実施に向けて自身に課せられた業務・役割を遂行した。
- ✓ 一般入学試験（前期）の折、主任監督者としての業務を支障なく遂行した。
- ✓ 助産別科一般入学試験に関して、依頼された業務を支障なく遂行した。

● 2016. 4. 1～現在に至る 学び場プロジェクト委員

- ✓ 2016 年度より、旧 FD 研修企画委員会メンバー（5 名）のうち、上村眞生准教授（福祉学科）を中心に、教・職・学合同の全学的な取り組みとして、「学びの拠点づくり」として、主に看護学科、福祉学科の学生有志による自主活動グループ；STEP UP への支援を継続して行っている。
- ✓ 昨年度に引き続き、看護学科、福祉学科の新一年生を対象に、教務課との連携を図りながら、先輩学生による新 1 年生への「履修指導支援」を企画・実施した。今年度も多くの学生が参加しており、次年度もさらに充実した支援が行えるよう工夫していきたい。
- ✓ 教員集団としては、本学共同研究費の助成を受けた「社会人基礎力養成のための『意図的な Hidden Curriculum（潜在的カリキュラム）』構築に関する研究」に継続して取り組んでいる。

【学科役割】

- 2018 年度より、他 3 名の教員（講師 1 名、助教 2 名）とともに実習コーディネーター（統括）を継続して担当、年間実習計画案の策定、実習要項作成、実習生の要件整備（予防接種等の勧奨・確認等）、実習オリエンテーションの企画・運営、実習会議等の日程調整、公文書発送準備、実習中の学生支援、インシデント・アクシデントレポートの分析・報告など、必要に応じて実習コーディネーター会議を開催し、多岐にわたる業務を遂行した。
- 看護キャリアセンター：認定看護師教育課程検討委員および助産別科推薦・一般入学試験関連業務等を継続して担当、課された業務・役割を遂行した。
- 2019 年度より、他の教員 3 名（講師 1 名、助教 2 名）とともに 3 年生アドバイザー（責任者）を担当、3 年次生の学習・実習・進路についての全般的な支援を行った。また、実習・就活・国試対策等、保護者の関心事への情報提供の機会として 3 年生保護者懇談会を企画・運営し、多く（46 家族 51 名）の参加を得た。